



## 教父学入門

ニカイア以前の教父たち

9月12日発売

土井健司 [著]

キリスト教の基礎を作った人たち。

その百花繚乱の世界への道案内。

使徒教父、弁証家、アレクサンドリアのクレメンヌスやオリゲネス、テルトウリアヌスにキプリアヌス等、また古代文献に表れた女性たちも視野に収めながら、現代のキリスト教の考え方に決定的な影響を及ぼした教父たちの世界へと興味深いいざなう、類書のない貴重な入門書。



土井健司 (どい・けんじ)

1962年生まれ。関西学院大学神学部教授、同神学部長。神学博士。関西学院大学神学部、同大学院神学研究科、京都大学大学院文学研究科で学ぶ。著書『神認識とエペクタシス』(中村元寛)、『キリスト教を問いなおす』、『古代キリスト教探訪』、『愛と意志と生成の神』、『司教と貧者』、『キリスト教は戦争好きか』、『救済看護とフィランソロピア』ほか多数。

同じ著者による既刊書

古代キリスト教探訪 キリスト教の春を生きた人たちの思索

教父神学を専攻する気鋭の研究者が、平易な語り口で古代キリスト教世界、驚くほど新鮮で刺激に富む古代キリスト者の思索と生活を紹介する。

◆四六判・260頁・定価2420円

司教と貧者 ニュッサのグレゴリオスの説教を読む

「カッパドキア三教父」の一人グレゴリウスが説いた「社会的な説教3編」を収録。訳者による周到な解説と資料から蘇る4世紀の教会の姿。

◆四六判・192頁・定価2420円

◆四六判・224頁・定価2640円

# 呻きから始まる

祈りと行動に関する24の手紙

栗田隆子 著 ◆四六判・245頁・定価2200円

私にとってフェミニズムと信仰は  
どちらも必要なものです。

著者が、言葉になる以前の「呻き」としか言いようのない地点から「宗教」「信仰」そして「フェミニズム」と出会う自らの生の歩みを辿る。登校拒否とシスターとの出会い、洗礼と教会、進学と恋愛、研究への失望と就職の困難、運動と組織などの問題をめぐり、読者にあてた手紙のようにして綴られた『福音と世界』連載の単行本化。話題を呼んだ『ぼそぼそ声のフェミニズム』に次ぐ待望の第二作目。

9月22日発売



栗田隆子（くりた・りゅうこ）

1973年生まれ。大阪大学大学院でシモーヌ・ヴェイユを研究。非常勤職や派遣社員などのかたわら女性の貧困問題や労働問題を中心に発言。08年「女性と貧困ネットワーク」呼びかけ人となる。14年から17年まで「働く女性の全国センター」(ACW)代表。

新たな旧約略解シリーズ (全4冊) 第2弾

9月1日発売

# 旧約聖書 歴史書 要約と概説

宮平 望 著

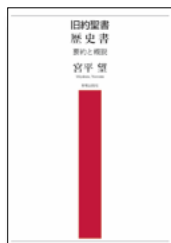
◆A5判・254頁・定価2200円

旧約聖書の各章をヘブライ語原典に基づいて要約し、新約聖書の視点からメッセージを解説する。創見に満ちた解釈を随所に盛り込み、聖書の通読が楽しくなる。複雑多様な旧約の世界を学び進めるための好個の手引き書。

「歴史書」はヨシュア記／士師記／ルツ記／サムエル記上／サムエル記下／列王記上／列王記下／歴代誌上／歴代誌下／エズラ記／ネヘミヤ記／エステル記を扱う。

既刊 旧約聖書 歴史書

近刊 旧約聖書 文学書、旧約聖書 預言書



雨宮栄一著

## 反ナチ抵抗運動とモルトケ伯

〔課題〕

「クライザウ・サークル」と呼ばれる反ナチ・グループの中心人物としてゲンタポに逮捕され刑死した法律家モルトケ伯の評伝。著名な元帥の甥の孫であり、広大な領地を所有するユンカーだった伯が、反ナチの思想と行動に至るプロセスを丹念に追う。著者の遺作。

四六判・予価27000円

ジャン・カルヴァン著／森川甫・吉田隆訳

## 共観福音書註解 下

マタイ・マルコ・ルカの三福音書を対観しながら記された註解書。福音書の「調和」を見出そうとする改革者の情熱。上巻の刊行から36年ぶりの邦訳完結となる。

A5判・予価85000円

宮田光雄著

## 良き力に不思議に守られて

単行本未収録の珠玉の説教五編のほか、メルヘンを通して神と出会う可能性を考察した「メルヘンの森で神と出会う」、神表現の極限を追求したユニークな現代造形作家バーネット・ニューマンを巡る論考など、根源的信頼としての信仰にささぐらう七編を収録。

小B6判・予価15000円

● 8月に出た本と雑誌

## 初期キリスト教の世界

松本宣郎著

ローマ帝国史と心性史の視点から初期キ

リスト教史研究の地平を拡大してきた著者の11の論考・講演を収録。当時の人々の心性、職業労働観、教会の営みなどをめぐり、当時のキリスト教をめぐって多岐にわたる論点が浮かび上がってくる。



◆四六判・定価33000円

## たどりつくまで ロバと三人の旅

A・ブース文、S・アッシャー絵、真下弥生訳

危険な権力者に追われ、安住の地を求めて旅するロバと親子三人。聖家族の《エジプト逃避》を現代の難民に重ね合わせながら、不安に満ちた、しかし人の温もりに支えられた旅路を描くユニークなクリスマス絵本。

◆A5変型判・定価16500円



## 福音と世界

◆定価6600円

9月号

大日本帝国の軌跡

——東アジア・民衆・キリスト教

寄稿者：高島千代、洪伊約、渡部和隆、役重善洋、松谷暉介、三野和恵／大野光明／好評連載 山下壮起、C・J・サンダース&A・ヤーバー、山口陽一、山崎ランサム和彦、田崎英明、村澤真保呂、勝村弘也、有住航

●乳幼児にとつて室内は危険でいっぱい。机や棚の配置を見直し、角には緩衝材をつけ、口に入れてはならないものは手の届かないところへ……。育児本や保健所のパンフレットに必ず書かれているこうした文言をみるたびに、わたしが思い出していたのは映画『ファイナル・デステイネーション』シリーズのことでした。二〇〇〇年の第一作から回を重ね、現在はリブート版の制作が進められている人気作品です。基本的にいつも筋書きは同じで、自らが巻き込まれる事故を予知し間一発で難を逃れた主人公たちが、結局は死の運命を逃れられず凄惨な最期を遂げていくというもの。不気味な葬儀屋を演じるトニー・トッドの存在感もすばらしいのですが、なんといつても最大の見どころは、死のバリエーションでしょう。道路、倉庫、バススタブ、ジム、プール、日焼けサロン、洗車場、エスカレーター……さまざまな舞台と小道具が奇想天外な仕方でも組み合わさって作用し、偶然とも必然ともつかない事故死を引き起こしていきます。そのさまはグロテスクながらどこか滑稽でもあり、誰が言ったか「おとなのピタゴラスイッチ」とはまさにこのこと。以前はそれを楽しんで観ていたわけですが、いま、わたしには、同シリーズはじつに教育的な作品に思えてなり

ません。映画が創意工夫を凝らして表現するように、まったくありえないような状況でも事故は起きるのです。『ファイナル・デステイネーション』だったらどうなるかを考えろ」、その気持ちを胸に過ぐす毎日です。(堀)

●UNHCRによると昨年末の時点で難民は九千万人近くに及びますが、今年勃発したウクライナ戦争で国外に避難した人々の総数が一一〇〇万と言われますから、難民はゆうに一億人を超えるでしょう。命を脅かされ、家を捨て、国を離れ、異国の地に留まらざるをえない人々、特に子どもたちの苦しみは想像に絶します。八月に刊行した絵本『たどりつくまで』は、「おそろしいこと」が迫っていると知った「男の人」と「女の人」が「赤ちゃん」と共にベツレヘムからエジプトに避難する旅を、ロバが淡々と語ります。登場する固有名詞は二つの地名だけ。美しい絵とぎりぎりまでそぎ落とされた言葉が旅の様子を伝えますが、悪く言えば盛り上がりにもひねりにも欠けるかもしれません。しかし人類の救い主が最も貧しい家畜小屋で生まれたのみならず実は難民の一人でもあったということ、そして彼らに手を差し伸べた無名の人々がいるという、重要な省察課題として静かに差し出しているようです。(小林)

# 福音と世界

2022年  
10

A5判・80頁・定価660円・送料70円  
年間予約購読料(送料共)8760円

## 特集「土と農を愛する」

### 愛農精神と福音

——「小谷純」と愛農高校の挑戦—— 泉川道子  
天のめぐみ 大地の力、いのちのつながり

——エップ・レイモンド&荒谷明子  
押田成人神父と高森草庵—— 石井智恵美  
土と農を大切にする

——メタノイアとコンメンサリス—— 李 民 洙

信仰の証しとしての「土と農」——ドイツの  
教会の例から—— 木村護郎クリストフ

土地に根をおろした対抗社会—— 福嶋 揚

「書評」浅野淳博「死と命のメタファ」…並木浩一

### 【好評連載】

◆フッド・スピリチュアルズ 3 ……山下壮起

◆教会に待てるマイアグレクション 5 サンダース ヤーパー

◆「日本のキリスト教」を読む 8 ……山口陽一

◆新約釈義 ルカ福音書 9 ……山崎ランサム和彦

◆間隙を思考する 非同時代性のために 18 ……田崎英明

◆古代イスラエル文学史序説 19 ……勝村弘也

◆霊性のエロジーあるいはマリヤリア 20 村澤真保呂

◆福音のフラグメント 20 ……有住航